

# 色染物質会

## 会誌 第5号

### Index

ページ		ページ	
2	会長の挨拶	21	クラス会だより S35年
3	クラス会だより S28年	22	廣瀬治助のことなど
4	文様染の系譜 (5)	24	クラス会だより S37年
12	クラス会だより S29年	26	奈良のこと (4)
13	京都の史実(4)	29	クラス会だより S45年
18	クラス会だより S33年	30	会員名簿
19	隕石衝突と地球上生物の絶滅	32	編集後記

2014年4月発行

## 第4回総会を迎えるに当たり

色染物質会の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

平素は当会の運営にご協力をいただきまして篤く御礼申し上げます。

第4回総会、懇親会は今までの本学ではなく、交通の便の良い京都駅近辺のホテルに、また時期も比較的行事の少ないと予想されます6月末に開催することになりましたので、多数ご参加いただきますようご案内かたがたお願いします。

第3期の行事は総会、懇親会、新年会、散策会、ゴルフコンペ、会誌発行、HPの更新等計画どおり遂行できましたが、会誌、HPを除くいずれの行事も少数の参加に留まり課題を残しました。会員各位のさらなるご協力をお願いする次第です。

決算面では繰越金が期首より13万円減少しました。これは会計期間を半年間延長したことによる支出増10万円と、設立準備委員会当時の交通費5万円弱を支出したことが主な要因で、3期中にKIT支援金10万円(2期分)を受領していますので、これら収支を相殺しますと概ね計画どおり推移できました。

第4期の行事計画は第3期実績を踏襲し、前期実績に準じた配分の予算案にしました。また役員候補につきましては、現状の副会長ポストの空席解消、顧問及び事務局の増強等を立案しました。詳細につきましては別添資料をご覧ください。

会員数は現在210名弱と前期末180名余より10%増加しましたが、入会状況を卒業年次別に見ますと、バラツキが大きく、特に昭和60年以降に卒業された若い方々の入会は僅少であり、中でも平成7年以降の入会者は皆無であり、当会の継続が危惧されます。会員各位の身近に該当者がおられましたら是非入会をお勧めいただきますようお願いいたします。

平成26年4月吉日

会 長 佐藤 忠孝

# 色染昭和28年卒クラス会

昭和28年色染工芸学科卒業生の同期会が平成26年1月28日京都にて開催されました。10名の卒業生に加え故人の奥様一人と目の不自由な里田氏の夫人計12人が相集い歓談の一時を過ごしました。



写真氏名は

前列左より 故太田光一夫人 里田嘉彦夫人、里田嘉彦、萩原理一、亀迫重男

後列左より 西川三郎、吉岡悠、家久浩一、石橋道弘、稲井新太郎、出原昭巳、田尻弘

(色染 昭28・萩原 理一 代行 (家久 浩一))

## 文様染の系譜 (5)

日本の鎖国政策が終息し、世界に目を向けると、産業革命の洗礼を未だ、受けてない日本国と日本人は、工場生産による工業製品に瞠目した。明治政府は衣料の欧米化を促進すべく、繊維産業を指導した。政府は数回に及ぶ内国勸業博覧会を東京、京都、大阪等で開催し、日本独自の伝統産業と、海外の新商品を国民に知らしめた。

今まで閉じられていた消費者の目が、とりわけ引き付けられたのは、繊維製品では外国出品のウールのモスリンとプリントの綿ネルであった。ウールは羊がわが国には生存しなかったもので、日本人にとって初めて手にする、珍しい素材で、絹よりも安く、新たに出現した合成染料の発色が美しかった。モスリンに合成染料で友禅文様を染め出したモスリン友禅は消費者を魅了し、モスリンの輸入数量は急激に増加した。一方捺染綿ネルは政府の繊維産業の近代化政策の思惑と資産家の投資意欲が一致し、直ちに起業化する運びとなった。その為紡績・製糸・織布・精練・染色・起毛等の関連工場が操業を始め、ローラー捺染機の1号機がわが国で始動したのは、明治31年(1898)のことである☆i。

我が国はこれまで、三度やむなく文様染の転換を行った。

第一回目：遣唐使が廃止され、蜜蠟の輸入が止まり、藤纈染が出来なくなった時(平安時代)。

第二回目：公家を抑え、武家が台頭し、文様染が見直された時(室町時代)。

第三回目：消費動向が武家から商人に移り、綿織物を国内で量産するようになった時(江戸時代)。

第四回目の転換期は、産業革命の申し子のようなローラー捺染機がわが国で捺染を開始した時である。

この頃から我が国の文様染の系譜は、和装品と洋装品の二つに枝分かれする。その後新しい繊維加工、新しい繊維素材、新しい加工機械(これには文様染の機械も含まれる)、新しい染料が開発され、二つの系譜は遅い速いはあったものの、夫々それなりに、同じことを体験し、同じように進化して現在に及んでいる。しかし、和装品は民族衣装の沈滞、洋装品は製造拠点の海外移転という大問題を抱えることになった。これが新たな転換期になる可能性が出てきたが、即断は許されない。

話を明治期に戻すと、海外からもたらされるおびただしい情報の中で、文様染めの一手段として、ローラー捺染機を駆使することによる、文様染めの量産、大衆化は非常に魅力のあるトピックであった。こうした中で、初めて捺染機を輸入し、使用したのは京都の堀川新三郎氏であって、自ら英国に渡航し、片面6色1台を購入して帰り、モスリン及び綿ネルの捺染を開始したのは明治31年4月2日のことである。

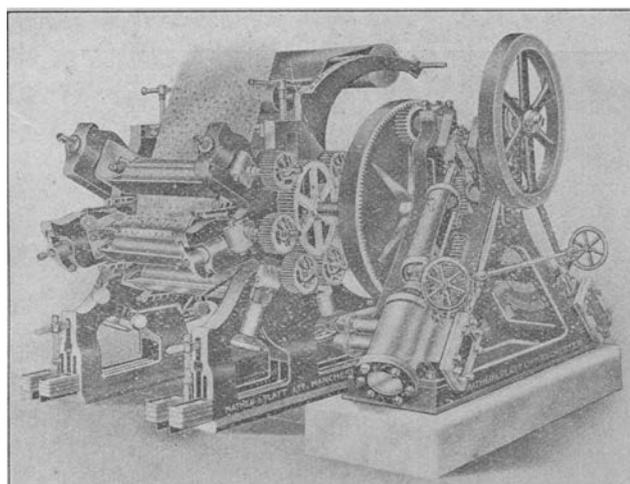


図-1 英国マザー&プラット製 6色片面捺染機  
蒸気タービンを動力源とする明治期の捺染機  
西田博太郎著 近世染色法 捺染編

	設置者	国別	製作者	機種
明治31	堀川新三郎	英国	ジョンウッド	広幅6色
明治32	五二会綿ネル	仏国	アルサス	2色両面
明治32	千草安兵衛	英国		広幅6色片面
明治33	吉川喜作	英国		2色片面
明治33	紀州綿布精工	英国		4色両面

表 1

明石厚明日本機械捺染史

その後表1の如く堀川工場を含む、5工場が相前後してローラー捺染機をイギリス又はフランスから購入し、綿ネルの捺染を開始した。何れも我が国機械捺染創業時代の企業であって、機械器具の類は勿論、彫刻ローラーとそれを製造するための道具類に至るまで、尽く海外より輸入に頼らなくてはならず、よくその困難を克服して、捺染技士、調液技士、ローラー彫刻技士等の養成に努め、遂にはそれらを自給自足し、輸入に頼る必要のないレベルに至るまで向上させた努力は、高く評価されるべきである。

かくして綿ネル全盛時代が到来する。是が文様染の第4の転換期である。

此の頃、和歌山では高橋亀太郎が明治35年(1902)岡崎愛之助製作の国産第1号、2色ローラー捺染機を設置し、好成績を収めたので、同地の才村新四郎、小池栄三等が相次いで同機を設置し、綿ネル捺染を始めた。これに刺激され、当時同地では雄型捺染が盛んに行われていたが、これらの業者は順次ローラー捺染に転換して、産地を形成した☆<sup>ii</sup>。



図-2 京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵 AN-151-1-50-2 第5回内国博出展 京都市 京都綿ネル(株) 綿ネル捺染

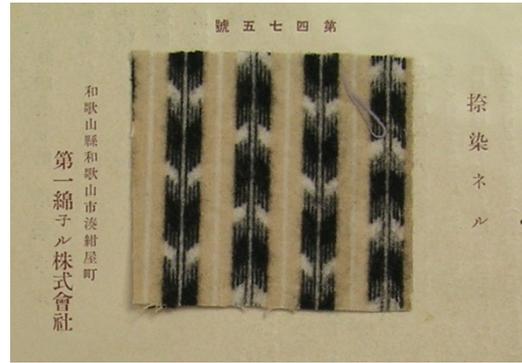


図-3 京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵 AN-151-1-238-1 第5回内国博出展 和歌山市 第一綿ネル(株) 綿ネル捺染

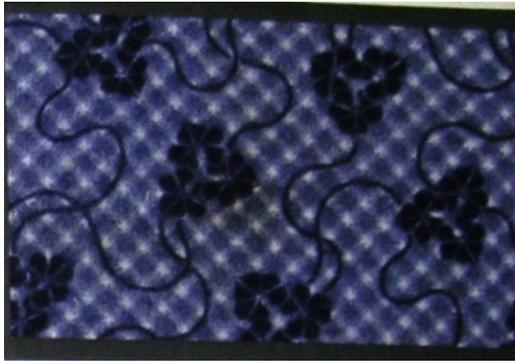


図-4 京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵 AN-55-1-4 明治期 ヨーロッパの捺染綿ネル

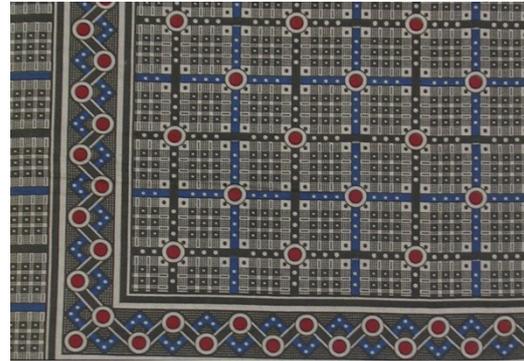


図-5 京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵 AN-28-4-24 明治期 ヨーロッパのローラー捺染 綿スカーフ

ローラー捺染機の国産化に成功した岡崎愛之助は、和歌山鉄工株式会社を創業し、捺染機をはじめ、種々の染色機械を製造し、世界的に有名な染色機械メーカーに成長したが、先年百余年の栄光の歴史を閉じた。此の頃京都で綿ネルの一貫生産を目的として設立された、五二会綿ネル株式会社は、近代産業として、綿ネルの量産体制を確立し、社名を日本製布株式会社と改め、更紗の生産技術の開発に力を注いだ。

一方の雄堀川新三郎は京都の東部、蹴上に新装成った発電所の近くに工場を持ち、綿ネルより先にモスリン友禪を手掛け、大阪の岡嶋千代造等と共に友禪の染法の近代化に努めた。その最たるものは、堀川新三郎が神戸のドイツ人ショーライス商会と特約して、亜鉛末を輸入し、これと石灰を糊に混ぜ、防染糊を開発した。これを末糊と言う。また植物染料の抽出液と媒染剤を混ぜ合わせ、これに糊

を混ぜて増粘して、色々な色糊を作り、これに先の末糊を併用し、最後に蒸熱により、染料を固着し、モスリン友禅を始めた。此の色糊を写し糊と言ひ、この染め方を写し染めと言うが、明治12年(1879)に写し染めが完成したと、京都近代染色技術発達史に記されている☆ iii。

この時は未だ、天然染料を用いていたが、間もなく輸入合成染料が用いられるようになり、彩は一挙に華やかさを増す。これが国民の間で評判を呼び、モスリンの輸入量が急増し、明治29年には45,466,000平方ヤードに達したが、此の事を事前に予測し、国産化の準備は整っていたので、この年をピークに輸入量は漸減し、大正期には、輸入モスリンは影をひそめる。

京都工芸繊維大学の前身である京都高等工芸学校が開学したのは日本最初のローラー捺染機始動に遅れること2年、明治33年(1900)のことである。色染科、図案科、窯業科、機織科等の学生に美術・工芸に関する教育を施すべく、必要な資料・教材を国内・国外から大量購入し、京都工芸繊維大学美術工芸資料館に収蔵した。AN-1137は1907年(明治40年)受け入れのモスリン友禅の資料である。資料は合成染料を用いており、47点の内1点は大阪の岡嶋千代造工場で染め、田村駒(株)を通じて販売されたものであることが、ほぼ確認されている。



図-6 京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵 AN-1137-2 モスリン友禅 ブルーとオレンジのドットの立体感が面白い



図-7 京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵 AN-1137-12 モスリン友禅

我が国の文様染の系譜は、この頃から二つに分かれる、和装品(着尺 どちらかという小幅物が多い)と洋装品(広幅物)とである。明治期には兼業する染工場が沢山あったと思うが、昭和特に戦後は専門化して、広幅と小幅織物は夫々専門の工場加工するようになった。和装品は絹製品が多く、生産数量は少ないが高度の技術を用いて高級品を生産する。

これに対し、洋装品は綿、合化繊等で数量は大きく、所謂量産品で輸出品の占める割合が大きい。唯商品は別々でも、技術的な変化は同じ経過を辿る。昭和初

期にスクリーン捺染が台頭する。生産能率は悪いが、発色が美しく、多色が使え、文様のピッチを自在に変えることが、出来るのが特色である。昭和3年(1928)母校の田中隆吉先生が、ドイツ留学で得た捺染技術を基礎に、小野木次郎が彼の指導を受けて、実用化の研究を進めたことに始まる。



図-8 京都工芸繊維大学美術工芸  
資料館蔵 AN-1137-46  
モスリン友禅

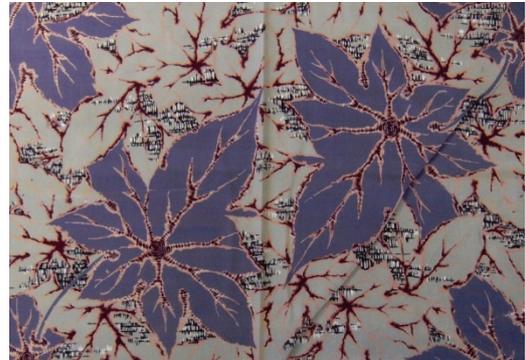


図-9 京都工芸繊維大学美術工芸  
資料館蔵 AN-1137-17  
モスリン友禅

一方これとは別に、京都市立工業研究所に勤務していた、田中秀人も独自に研究していた。昭和9年(1934)京都の中島友禅が、スクリーン捺染による、友禅を市場に送り出したのを手始めに、横浜、高岡、神戸に波及した☆iv。此の捺染方法を機械化したのがフラット・スクリーン捺染機と走行式スクリーン捺染機である。これ等は間歇運動する捺染機であるが、能率を上げるために回転運動をする、ロータリー・スクリーン捺染機が登場した。此の機械は、ローラー捺染機に代わるものとして、期待されたが、その役割を十分果たしていないのが実情である。20世紀末にはコンピューターの世となり、P.C.の普及と共に、印刷に近いインクジェット・プリンターが普及し、明治末期に遅れ馳せながら産業革命に飛び乗り、ようやく完成した近代工場による集中生産方式が早くも、崩壊し始める。

話を明治にもどす。文様染の原点は法隆寺の三纈に源を発すと先に述べた。三纈は凡て防染による文様の表現であるこの方式では、地色は浸染か引染によって表現するので、深みのある味わい深い色を表現することが出来る。日本人はこの事にとことん拘り、独自の方法により型染め、友禅染、板締め染、絞り染等を完成して、明治の開国を迎えた。ようやく政局も安定し、明治十年を過ぎる頃から衣料の近代化や洋風化に、政府も力点を移すようになり、学者の招聘・交流、留学生の派遣、技術の導入・外人技術者との接触、博覧会などによる洋風生活と商品の紹介等を積極的に行うようになった。先に述べた京都工芸繊維大学の前身京都高等工芸や京都高等蚕糸の設立はその一環である。

衣料の洋風化で先ずしたことは丁髷を切り、所謂散切り頭にするこことである。

江戸時代役人は武士の仕事であったので、武士の恰好をしておれば役人と考えればよかったが、明治政府は役人や公務員は一般庶民から採用した。特に軍人、警官、郵便配達人、国鉄乗務員等には、ユニホームを給付しなければならなかった。

そのため大量の綿布、羅紗地を必要とし、その染色が規格通りにならなければ、ユニホームの意味をなさないで、その技術者を養成することが緊急の課題であった。従って此の頃立ち上がった近代染色工場は、こうした仕事を政府から受注することを目的に、設立したものが多かった。当時ヨーロッパにおけるユニホームは黒色が多く、それに使う染料はメキシコ産のログウッドと、その精製品ヘマチンが大勢を占め、染色技術習得のため渡欧した、稲畑等が持ち帰ったのはその量産化技術であった。とは言え、当時の世界的なトピックは合成染料による浸染・捺染であった。

ここで染料の開発史に注目すると、色染料の卒業生なら常識の1856年ウイリアム ヘンリー パーキンによるモーヴ(商品名ティリアン パープル)の発明に始まる。これは絹を美しい紫に染める、塩基性染料であった。1852年にマジエンタが認識されていたが、これが染料として商品化したのは、モーヴに後れること3年1859年の事であった(CI No.677)。1861年ロートがメチール ヴァイオレット前後してサフラニン、ビスマルク ブラウン等が開発された、いずれも塩基性染料である。

此の頃は未だ、偶然に出来た染料が多かったが、当時の化学者の目標は、インドの藍、トルコのアリザリンであった。藍の合成、工業化には長い時間を必要としたが、先ず、1869年クレベ、リーベルマン、カロがアリザリンの合成に成功した。これは人類が長年使いならした天然染料を、意図して合成した最初の人造染料である。1871年クレベとリーベルマンは更にアリザリン ブルー S (CI No.1067)を合成し、アリザリン染料が茜色以外の色に発展する可能性を示唆した。

動物性繊維染色を目的とする、酸性染料と酸性媒染染料については、1862年ニコルソンによるソリュブル ブルーの発明を嚆矢とする。1871年にはカロによってエオシン(CI No.768)が作られた。此の頃直鎖アゾ染料の研究が進み、赤、青、黒等の酸性染料や直接染料が次々と発表された☆v。

1881年ケヒリンはガロサイアニンを発見した。これはオキサジン属の媒染染料で、茜根、フスチック、ログウッドのようにクロム媒染で羊毛を染めることができる。1885年メルドラがアリザリン Gを、ニーツキがアリザリン Rを発見した。いずれもクロム媒染で羊毛を染める。

キャリコプリンターにとっての福音は、ナフトール染料の出現である。ベータナフトールのアルカリ性水溶液を綿布にパッド・ドライして、ジアゾ化したベータナフトールアミンの液を通すと、堅牢な赤が得られた。発見したのはリード ホリデイで、ホリデイ父子会社を作り、1880年に発売したがそれ程反響はなかった。

1896年になって、ヘキスト社やバディッシュ社がパラレッドその他の名前で

売り出したところ、洗濯と日光に堅牢で且つ、アリザリン赤の代わりに使えることが分かり、大評判になった。1897年バディッシュ社がインジゴ ピュアー **BASF** を、ヘキスト社が別法によってインジゴ ピュアー **MLB** を発売した。1901年ヘキスト社は更に改良し、インジゴ ピュアー **MLB** を経済的に量産することに成功した。これはアドルフ バイヤーが研究に着手してから、35年後のことである。これは長い歴史の中で、人類と深い関わり合いを持つ、二つの染料、藍と茜が人類の手によって作り出された、記念すべき時である。このビッグニュースは当然、我らの母校、旧名京都高等工芸学校色染科にも、教育資料付きで齎されたであろうと思う。

鶴巻鶴一先生寄贈の AN-24,AN-25 はインジゴの布染めと、アリザリンの糸染めの資料である。AN-28はパラレッドと思われる赤地に塩基性染料で調色した、美しいハンカチのサンプルである。

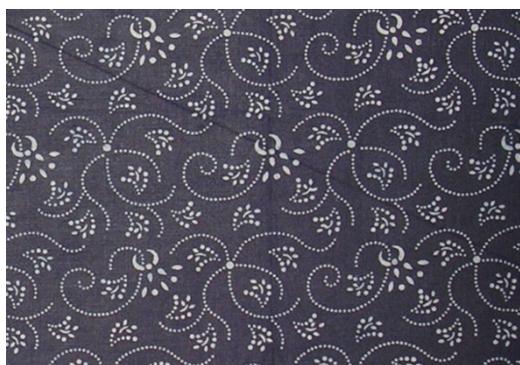


図-10 京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵 AN-24-48-2 BASF (バディッシュ) インジゴ地染め白色顔料捺染



図-11 京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵 AN-25-1-06 BASF アリザリンレッドによる先染織物



図-12 京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵 AN-28-2-06 合成染料によるターキーレッド風ローラー捺染綿スカーフ

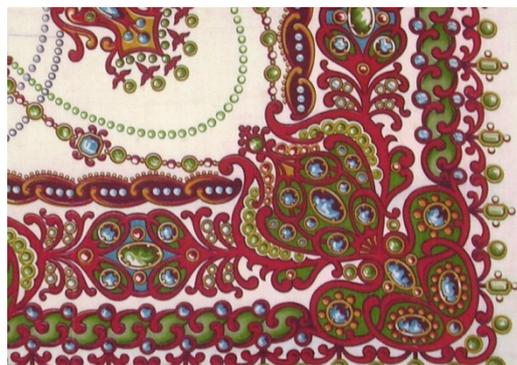


図-13 京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵 AN-28-5-31 塩基性染料によるローラー捺染綿スカーフ

これに続いて酸性染料、塩基性染料、媒染染料、バット染料、硫化染料、酸化染料、ナフトール染料等がドイツ、スイス、イギリス、フランス、アメリカ等で製造され日本はそれを輸入した。繊維関係では絹、綿、羊毛、麻を使用するようになったが、絹麻以外量の多いものは、すべて輸入に頼らなければならず、パルプから製造する、化学繊維即ち、レーヨンの製造には早くから着手した。このように明治期には、熱源、素材、着色料、加工機が大転換したので、文様染めもそれにつれて変化し、それが 20世紀前半まで続き、20世紀後半の、合成繊維の時代へと引き継がれる。

(参考文献)

- 
- i 日本機械捺染史 明石厚明編 P-9 (1943)
  - ii 日本機械捺染史 明石厚明編 P-9 (1943)
  - iii 京都近代染色技術発達史 京都市染織試験場 P-40 (平成 2 年)
  - iv 京都近代染色技術発達史 京都市染織試験場 P-181 (平成 2 年)
  - v 絵具染料商工史 大阪絵具染料同業組合  
昭和 13 年 1 月 1 日 P-1823 P-1836 P-1832~1834 P-1851

(色染・昭 2 8 萩原理一)

---

## 会報投稿規定

会員の皆様からの投稿が会報の生命です。どうかご協力をお願いします。

- ① 会報の発行目的に適うものであれば、内容に特別の制限はありません。
- ② 下記の様なものは掲載不可となりますので、ご留意下さい。
  - 1) 特定の宗教、政治、企業等の宣伝に類するもの
  - 2) 本会の品格を損なうような内容のもの

### ③ 投稿の形式、方法

#### 1) パソコン原稿の場合

WORD 文書 A 4、横書き、文字数：40、行数：40、  
全体の字数：3200 字以内目標 (図、写真を含む)

#### 2) 筆記原稿の場合

400 字詰め原稿用紙に横書きし、2~8 枚以内、  
プリント写真、手描き図なども可。

送付先：色染物質会事務局 佐藤忠孝宛 (sikisen@matugasaki.com )  
〒 610-0121 城陽市寺田今堀 108-15

## 色染昭和29年卒同期会

私達29年卒の同期会は、幹事を担当した西村孝一郎君の世話で、平成25年11月26日京都駅南側の新・都ホテル内の京大和屋にて午前11時半より開催出来ました。

集まったのは7名で前回より1名減で、年々わずかながら減っていくのが寂しいです。

今回も議題は、「同期会の今後の運営方法等について」と毎回同じ様なことを掲げました。答えは何時もと変わらず、「出来る時まで 続けましょう」となり、今回は特別に近郊で1泊することで、まとまりました。後、同ホテル内の喫茶ルームで更に雑談を交わし、夕方の5時近くに解散しました。

ホテルの前で撮った写真です。

左から 山方秀夫、梅本 顕、芝山達雄、西村孝一郎、金光範明、時岡嘉一郎、寺田昌平



(色染 昭29・時岡嘉一郎)

# 知ってるようで知らない京都の史実 4

## 大覚寺と大沢の池

### \*時代劇のメッカ大覚寺と大沢の池に滝があった…\*

京都は時代劇を撮影するにはなくてはならないロケ地ですが、その中にあっても大覚寺と大沢の池は最も多く出てくる背景ではないでしょうか。定番ものの【鬼平犯科帳】【水戸黄門】や【剣客商売】等々必ずといっていいほどこの背景が出てきます。此処に滝があったら恐らく一番TVや映画に多く背景として使われたに違いありません。でも、此処に間違いなく《滝》があったのです。

嵯峨大覚寺にまかりて、かれこれ歌よみ侍りけるに

『滝の音は 絶えて久しくなりぬれど 名こそ流れて なほ聞こえけれ』 藤原 <sup>きんとう</sup>公任

大覚寺の裏山（北側）には大きな山はありません。大文字に併せて燈る【鳥居】の続きの低い山並みがあるだけです。しかも山裾から大覚寺まではすぐ傍（500m 弱）で小高い丘のような山が見えます。このような平地に近い場所に本当に滝があったのかと、最初に疑問を感じたのは住まいを大覚寺の近くに移した直後でした。

大覚寺の東に大沢の池が広がっています。その池の少し北側に名古曽の滝跡があります。滝の水は平安時代に既に絶えています。公任のあまりにも有名なこの歌は【小倉百人一首】にあります。長保元年（999年）9月藤原道長の紅葉狩りに同行した際に詠まれたとの事です。



このような地形の場所に自然の滝がある訳はなく、この滝は大沢の池に水を入れるための作り物の滝に違いはないと思いました。池の位置は殆ど変化していませんが、嵯峨院の建物は池の北側にあつたらしく、現状とは異なっていたようです。このため池に水を入れるためには敷地内を通さねばなりません。この池に流入させる小川に細工を施し、池のすぐ傍で噴出させれば滝にならないでしょうか。しかも直ぐ見える丘のような 50m ほどの高台があるのです。この辺りに流入のための池を作り、この水をサイフォン式に噴出させればある筈のない所に【滝】が突如出現する訳です。その上池に《観賞用だけでなく農業用》双方の役目を果たさせるためには、相当量の水量が必要です。

嵯峨天皇の離宮、嵯峨院が【大覚寺】として再出発したのは貞観 18 年（876 年）の事で、嵯峨院はそれより更に遡り弘仁 5 年（814 年）頃に建てられています。公任が詠んだ 200 年近くの昔なのです。この他にも同時代の女流歌人で才女の誉れ高い <sup>あかぞめ えもん</sup>赤染衛門 も大

覚寺を尋ねて次の歌を詠んでいます。

【あせにける いまだにかかり 滝つ瀬の はやくぞ人は見るべかりける】

今ある滝も早く見に行かないとなくなってしまうかも？…です。そして更に百年後、この赤染衛門の歌をうけて、<sup>さいぎょう ほうし</sup>西行法師が同じく大覚寺を訪れ下記の歌を詠んでいるのです。

【今だにも かかりと言ひし滝つ瀬の そのおりまでは昔なりけん】

要するに、平安時代の頃でさへ<sup>なごそ の たきあと</sup>名古屋の滝跡が著名だったのです。ある筈のない所に実際に滝があったからなのでしょう。<sup>きんとう</sup>公任が詠んだ頃には既に200年近くの歳月が流れているのです。地中に埋められた遂道には様々な事由で物が詰まり、とうとう水が涸れてしまったのではないのでしょうか。

### \* 嵯峨天皇はどのようなお方だったか \*

嵯峨天皇は桓武天皇の第六皇子として延暦五年（786年）長岡京でお生まれになっ  
ています。平安初期の三筆として空海・<sup>たちばなのはやなり</sup>橘逸勢・嵯峨天皇はあまりにも有名で、ご自筆の般若心経が大覚寺の寺宝として現存しているそうです。当然のことながら、空海とは非常にお親しい間柄だったようで、中国から帰った空海は嵯峨天皇の勅許を得て弘仁7年（816年）高野山に真言密教の道場を、同14年には京都の東寺（教王護国寺）を開創しています。

嵯峨院の名も空海が入唐したとき、唐の皇帝 徳宗 は<sup>じゅうとく</sup>重篤で拜謁もできず翌年早々に崩御されました。空海はその葬儀に参列したに違いなく、その御廟が長安の北西にある【嵯峨山】でした。この嵯峨山のふもとには小さな湖水が沢山あるのです。そして大沢の池に写った山の姿が【嵯峨山】によく似ていたので嵯峨の名が付けられたそうです。嵯峨天皇も幼い頃から非常に聡明なお方で、四書五経をはじめ中国の文物に造詣が深く《漢詩》をご自身で作られるほどで、大沢の池で催される【観月の夕】は徳宗の観月会に因んでの夕べでした。その他《唐》の優れた文化を我国に採り入れるのにとっても熱心なお方でした。

### \* 菊の栽培は大覚寺から始まった \*

名古屋の滝に疑問を持ち、色々調べているうちに思いもかけない事に出くわしました。菊は一年生の栽培植物ですが、日本固有のものだと《天皇家の紋章にもなっているから》当然と信じていました。処が菊は中国原産の植物だそうで、万葉集にはキクが詠まれていることから、奈良時代には入ってきていないのです。キクが初めて詠まれるのは桓武天皇が催された菊花の宴が最初とされ、嵯峨天皇の時代になり、本格的に栽培が行われるようになったとの事です。奈良時代のウメに代わる新しい時代の中国の花として、これを嵯峨院の庭園で栽培し大沢の池に島を作らせ「菊が島」と命名されたほど菊を愛でられました。



これが機縁となり、日本の《華道》は全て大覚寺から発生しています。毎年日本各地で

開かれる菊の展示会の大元はこの嵯峨菊であり、元禄時代以降特に改良が盛んになり現在に至っていますが、最初の栽培は大覚寺から始まったのです。いま全国各地の愛好家が丹精こめた栽培技術を競っていますが、この起源は全て嵯峨天皇にあるのです。

## \* 大沢の池はどのようにして拓かれたのか \*

嵯峨院が拓かれるまで、この辺りは秦氏の農場だったようです。言うまでもなく秦氏は渡来人で、周りの緩やかな傾斜地を農場にするにはどうしても【ため池】が必要でした。このため池は大沢の池の東側に位置する【広沢の池】も同じです。(双方の池は有栖川という小川を通じて繋がっており、10m強の高低差があります) このため池は以前の京<sup>みやこ</sup>奈良にも沢山拓かれており、多分同質の農業用ため池だったのでしょうか。当初は山裾からの小川の水の流入でまかなっていたのですが、嵯峨院が創建されるに際し事情が変わってきました。ここからは筆者の推測によるもので、なんらの裏付けもありません。また専門の研究者にもそのような説を述べている人はありません。(念のため)

誰かがある筈がない場所に滝を作ったらどうだろうかと思い、実行したのではないかと想像し色々調べてみました。するとこの庭園全体を設計した人物がいることが判りました。《百済 川成》という人です。彼は名から判る通り、百済の人です。本職は【絵描き】ですが、多彩な知識があり、庭園の設計にも優れていたとのこと。彼が地中に土管式の遂道を埋め込み滝の石組みを作り、サイフォン式に水を噴出させたと想像するのです。実はこの技術は既に存在し奈良の池に取り込まれているようです。大沢の池に水を流入させるため噴水方式の滝を作るという事です。池の大きさから見てかなりの噴水が必要だったに相違ありません。

【滝の音は 絶えて…】とあるからには、そこそこの音があったとみられません。石組みの中からちよろちよろ出る程度のもものでは、とても滝とはいえないという学者の説があります。だがこの石組みは公任<sup>きんとう</sup>が詠んだすぐ後に解体されて、他へ移されています。西行<sup>さいぎょう</sup>が詠んだ頃はもうその姿を留めてはいませんでした。名古屋の滝石組みは百済川成が設計したのですが、2mや3mのものではなく少なくとも5m以上の高さがあったのではないのでしょうか。川成が書いた【作庭記】によると、滝の落ち口の石を選ぶ事が最も重要とされており、その事から今ある石がその石だとすれば湧き水程度の滝といえるようなものではなかったというのです。



公任<sup>きんとう</sup>が詠んだ直ぐ後に解体され、今に残っている石が【落ち口の石】とどうして確認できますか？。5m以上の高さがある石組から水が噴出して音を立てるとは考えられないのでしょうか。我が国の歴史学者の多くの方々が、史実のみを重視し、想像を交えないようです。大本営発表は殆ど信用できないのに、想像が【何故駄目】なのでしょう。

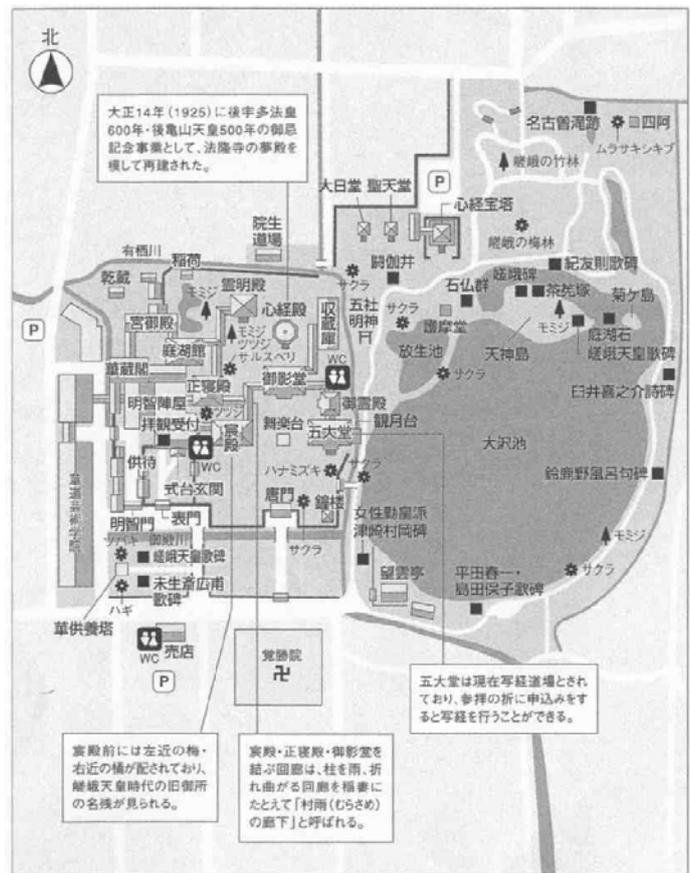
## \* 大沢の池の水源はどこから流入していたか \*

嵯峨院が建設された頃の水源がどこであったかは現時点では想像するよりありません。10世紀末には既に滝が涸れていて、大沢の池の水はかなり減っていたに違いありません。嵯峨院が大覚寺として再出発するのはご崩御の30年後で、その時点ですらかなり付近は荒れていたようです。ましてや作庭されてから200年も経過したとすればか大幅な変遷があつて当然です。

【大沢の池の景色はふりゆけど変わらず澄める秋の夜の月】藤原 俊成【新続古今和歌集】

この歌は公任<sup>きんとう</sup>から更に200年近く後に詠まれています。池の水は大幅に減じていたに相違ありません。この池の水位を回復させるのはこれから更に400年後16世紀末の【角倉了以】でした。鎌倉⇒室町⇒江戸と水位は回復できていないと推察されます。

角倉了以はこの嵯峨の出身者ですが、保津川の改作と併せてこの地域の水源の再開発を挙りました。清滝川から分水された水は山中に掘られた遂道を抜け、観空寺谷で有栖川の源流となり北嵯峨の田園地帯を通り、嵯峨天皇陵の麓から大覚寺へと流れ込んでいます。この工事は嵯峨の農業者に莫大な恩恵をもたらした事は言うまでもありませんが、意外にもあまり知られていません。大沢の池の水も大沢の池の水も昔から満々と水をたたえていたと思込んでいるだけです。



(大覚寺現在の配置図)

## \* 大覚寺と大沢の池のその後 \*

池はともかく、大覚寺はその後大きく変わります。後宇多天皇が隠棲され、大覚寺で院制を敷かれるのは元亨元年(1321年)です。このとき初めて金堂やその他の建物が現在の位置に移動されます。後宇多上皇が大覚寺中興の祖といわれるのはそれ故ですが、これらも足利尊氏とのいざこざで全て焼失したようです。またその後再建された伽藍なども《応仁の乱》で再度焼失しています。現在の建造物として安定するのは、室町後期から江戸になってからで、その間も現在も池は農業用水として働き続けています。

池の流入水にも色々な変化がありました。角倉了以の施工以降は、池の水が作庭以前より著しく増えたのは確実です。しかしこの流入水も昭和26年に改修されています。角倉了以の遂道がどの辺りだったのかの調査もなされていませんが水量は現在問題ありません。

大沢の池は近年蓮やアオコが大量に発生し、それを取り除くのに年間数百万円の費用が掛かるようになります。このため、1990年頃池に大量のソウギョを放ち水草を除去するには成功したが、今度はソウギョが水草を食べつくし、池の杭やその他の木材まで侵食し、池の水が漏れはじめたそうです。またソウギョの糞でガスが発生し臭いの害まで出始め、蓮や水草が全くなくなるという事態になりました。2000年頃から数年がかりでソウギョ駆逐がおこなわれ、現在は適当な範囲まで水草も生息するまで回復しています。大沢の池の下流にある、広沢の池は毎年12月に水を干し上げ2ヶ月間放置されていますが、これは水草の大量発生を防止するための措置でした。大沢の池も広沢の池も自然のまま放置しておいたのでは【景観が保てない】のです。

自然の風景と思い込んでいただけで、景観を保つには、昔から人の手入れがかかせないのです。スイスのアルプス風景が《人の手入れによって保たれている》のと同じと言うことを改めて思い知らされました。  
(昭和35年卒 松尾 秀明)

参考文献 史跡大覚寺御所発掘調査報告書(1997) 嵯峨大覚寺 人と歴史 (村岡 空 1988)  
大覚寺大沢池景観修復プロジェクト(真板 昭夫 2009) 大覚寺(京都の社寺No.30 淡交社) 他

## 大覚寺(嵯峨院)建設後の経年主な表示

弘仁5年(814年)嵯峨院建立 隠居所建物は全て大沢の池の《北側》に建設される

↓

貞観18年(876年)大覚寺として再出発 **60年余経過**

↓

長保元年(999年)藤原公任・道長と大覚寺を訪れる **180年余経過**

藤原公任の歌 【滝の音は 絶えて久しくなりぬれど 名こそ流れてなを聞こえけれ】

↓ 赤染衛門の歌 【あせにける いまだにかかりし滝つ瀬の はやくぞ人は見るべかりける】

(1170年頃)西行法師大覚寺を訪ね歌を詠む **250年余経過**

↓ 西行法師の歌 【流れ見し 岸の木立も褪せ果てて 松のみこそは昔なるらめ】

この頃には滝の石組みに使われた石の殆どが(閑院の庭に)持ち去られていたらしい

元亨元年(1321年)後宇多法皇大覚寺を再建 **500年余経過**

この時から僧房：本堂が池の西側に全て移転される

(1600年頃)角倉了以 保津川：嵯峨付近の河川を改修 **780年余経過**

(1680年頃)松尾芭蕉の句【名月や 池をめぐりて 夜もすがら】 嵯峨野落柿舎滞在のときの句

昭和26年(1951年)昭和の改修

1984年 昭和の発掘調査

(色染・昭35 松尾秀明)

## 543会クラス会（色染昭和33年卒）

今年の「関西 543 会」（54 は入学の西暦 1954 年を、3 は色染科番号です）は平成 25 年 9 月 19 日、台風一過快晴に恵まれ昨年と同じ南海電車みさき公園前の「寿司よし」にて開催されました。

菱田、三宅両君は体調不良で欠席でしたが 6 名が集合しました。残念な事に昨年に阪田 務君、村田春海君、今年春に出口 勲君の 3 名が他界され寂寥を感じましたが 1 年振りの再会とて旨い酒と新鮮な魚と泉州のわたり蟹に、にぎり寿司を賞味しながら来年迎える卒業 55 周年と傘寿を記念しての、「東京 543 会」との「合同 543 会」の相談、懐かしい学生時代の逸話、趣味の福田・井上両君の「謡」、平井、田村両君の「風蘭」の話し、平井君宅での碁会の話し、等々で、大いに盛り上がり、気が付いたら夕方になっていました。

昨年同様「名物のしらす」を買って、再会を約して散会致しました。

平成 25 年 9 月の関西 543 会の写真

（於・寿司よし（南海電車・みさき公園前））

田村 勇 平井雅夫 西山忠男 井上雅雄 福田雍弘 佐々木忠夫



（色染 昭 33 ・西山・井上）

## 隕石衝突と地球上生物の絶滅

昨年(2013年)の2月15日朝、ロシア中部チェリャビンスク州に直径17メートルの大隕石が運悪く町の近くに落下し、超音速物体が空気中を飛来する時に生ずる衝撃波が建物を襲い、ガラス等の飛散で1千人以上の負傷者をだしました。隕石の重さは1万トン、落下時のスピードは音速の50倍と推定されています。この程度の大隕石の落下は1908年のシベリア森林地帯で起きたツングースカ大爆発以来の珍しい現象だと報道されました。この情報に触れ私は地球誕生以来のドラマティックな巨大隕石落下の自然史上の大事件を思い出し、その状況と将来同様の惨事が起こる可能性についてお話ししたいと思います。

私は小学生以来の恐竜マニアで、当時は数少なかった恐竜の本を読みあさり、会社勤めをしてからは本場、米国出役の折は最新の書物を買って帰るのが楽しみで、本箱の中は恐竜の本がひしめいているという有様です。その間、学者、マニアの興味の的は恐竜絶滅の謎。これに関する論文は諸説紛々。地球寒冷化、地殻の大変化、海岸の後退、植物の進化、等々。これ程学説が右往左往した例は少なからうと思われます。1980年になって、米国カリフォルニア大学の地質学者ウォルター・アルバレスとその父でノーベル賞受賞者でもある物理学者ルイス・アルバレスおよび同大学放射線研究所の研究者2名が、白亜紀末の生物大量絶滅の主原因を「隕石」とする論文を発表したのを契機とし、多方面からの傍証が発表され、恐竜絶滅の謎に関わる長年の論争に決着がつけられました。

月面の無数のクレーターは噴火口の跡ではありません。巨大隕石落下の痕跡なのです。月の誕生以来巨大隕石が無数に落下した痕跡なのです。当然、地球にも同じ頻度で巨大隕石が落下していますが、3/4が海で覆われている地球では見つけ難く、陸上では降雨と風化によりくっきりとした痕跡は残っていないのが現状です。

ドラマティックな巨大隕石落下は白亜紀終末の約6550万年前、場所はメキシコユカタン半島の北西端チクシュループで、直径約200km・深さ15-25kmのチクシュループ・クレーターが現存しています。隕石の直径約15キロ(先日落下の隕石は直径17メートル)の小惑星です。衝突エネルギーは、広島に落とされた原爆の10億倍に相当。衝撃で地上の物質が瞬時に大気中に放出されました。隕石落下地点は浅海域だったと推定され、隕石落下により高さ300mに達する巨大な津波が北アメリカ大陸の沿岸に押し寄せたと推定されます。太陽光は遮られ、急激に寒冷化し、陸上や海面の植物は光合成が不可能となって食物連鎖が完全に崩壊した結果、動植物の大量絶滅をもたらしました。衝突直後の昼間の地上の明るさは満月の夜の10%まで低下し、この状況が数か月から数年続いたと推定されます。

当時、いわゆる中生代は大型爬虫類の全盛時代でありました。特に恐竜は三畳紀末(約2億年前)から白亜紀末(6550万年前)にかけて全地球上に君臨していました。翼竜は空中を飛行し、海中では魚竜、首長竜や大型の海トカゲ(モササウルス類)などが生息していま

した。巨大隕石落下を境にして、これらの大型爬虫類の全てが絶滅。生き残ったのは、爬虫類の系統では比較的小型のカメ、ヘビ、トカゲ及びワニなどに限られ、恐竜直系の子孫である鳥類も古鳥類は悉く絶滅しましたが、現生鳥類に繋がる真鳥類が絶滅を免れました。海中ではアンモナイト類をはじめとする海生生物の約16%の科と47%の属が姿を消しました。これらの生物がいなくなった後、それらが占めていたニッチ（niche、生態的地位）は哺乳類と鳥類によって置き換わり、現在の生態系が形成されたのです。

白亜紀末の動植物大量絶滅の謎が解明されたことで、学者先生方は霧が晴れたようにすっきりとしたかに見えますが、この事実が人類に新たな戦慄を与えることとなったのは皮肉であります。歴史は繰り返す。人類が同様の隕石落下で絶滅する可能性が証明されたことにもなったのです。恐竜帝国は三疊紀、ジュラ紀、白亜紀を通じて1億4千万年続きましたが、我々人類の誕生は2本の足で歩き始めたアファール猿人、俗名ルーシー（その昔、米国デンバー自然史博物館で面接しました）からでも400万年に過ぎず、例えば恐竜繁栄の期間を1年と置き換えれば、人類は生まれてまだ10日ちょっとになります。人類も恐竜と同じように1億年以上繁栄できるという保証はありません。来年巨大隕石が落下しても誰も文句は言えません。先日の隕石程度の大きさだと、落ちてくる前を見つけることができた例は、2008年にアフリカに落ちた直径2～5メートル程の隕石1つだけで、事前に予測することは難しい。巨大隕石の落下が例え事前に予測されても、原爆の10億倍に相当するエネルギーをもつ物体をしかも地球に被害をもたらす怖れのない遥かな上空で破壊したり、進路を変える技術は存在しません。近未来において人類が助かる手立ては地球を捨てて逃げることしかないのか。逃げた先に空気、水、食糧が存在しなければ、短期間生き延びることを意味するだけのことでしょう。

しかし人類は恐竜には持つことができなかった頭脳を獲得しました。我々が学生であった時代には、まるで趣味のための学問とみなされていた地質学、天文学は今や人類絶滅を未然に防ぐために欠くべからざる科学であることが認知されました。同時に過去のスペースシャトルの悲劇のようないくつかの尊い犠牲を払わなければその目的、例えば今の場合、巨大隕石飛来の早期予測と隕石回避を達成することができないのかと考えると、ミッションに果敢に挑戦する人たちに心からの敬意と感謝の意を捧げたいと思うものです。そして近未来か遥かな将来かはわかりませんが、必ず到来するであろうこの宇宙規模の自然現象に先立って、対応体制が確立し、子孫たちが末永く栄え続けることができるよう祈りたいと思うものです。

それとも、仏教で説える「諸行無常」はやはり避けがたい運命なのでしょうか。

（昭35・色染 松岡謙一郎）

## さんご会（昭和35年卒）クラス会

恒例のクラス会を平成25年11月25日（月）に大津プリンスホテルでの昼食会＋琵琶湖クルーズ（ミシガンクルーズ）の内容で計画し、下記の9人の参加のもとで実施しました。

体調不良の方や仕事の都合などのために常連の数人の方が不参加となったのは残念でした。

先ず、ホテルの36階の和食レストランにて眼下に琵琶湖や雲がかかった湖西の山並みを眺めながら前回のクラス会からの約1年の間の健康状態の変化や仕事・趣味などの話をして簡単な季節の会席を楽しみました。

前日の天気予報が当たり、昼食が終了するころには風雨が強まったので、全員相談の結果クルーズ参加は中止とし、ホテルの喫茶ホールで更に談笑し、次回の幹事（中村氏、園田氏）、開催日（平成26年10月28日（火））及び開催場所（JR京都駅近辺）を決め、再会を約して解散しました。

（色染・昭35年 黒田亘哉、衛藤嘉孝）

当日の参加者（敬称略）：左から

前列：林、園田、安部田、法貴

後列：衛藤、鈴江、中村、黒田、坂東



# 廣瀬治助のことなど

江戸時代の京都には大名屋敷が多数ありました。

主な職務は当時の手工業の中心であった京都の織物や調度品の調達と伝統的な有職故実の調査などでしたが、幕末になると政治的に重要な舞台として脚光を浴びることとなりました。当時の地図を見ると、各藩の屋敷が街中に散在しているのが解ります。

例えば同志社大学の今出川キャンパスは薩摩藩の敷地と公家屋敷跡であり、所在を示す石柱が校門の傍らに立っています。しかしその後、明治維新で東京奠都となり廃藩置県の制度が実施されると、急速に消滅しました。

中京区六角通油小路西入の地に郡上八幡藩青山氏の屋敷がありました。1340 坪の広さがあり、庭には 300 坪の大きな湧水池があったそうです。中の島に弁才天と竜神を、岸に稲荷明神が祀られていました。

室町時代に杉若越後守という武家の邸宅があったところから現在越後町の地名を残します。三つの詞堂は明治になって統合され越後神社となりました。近年まで「青山屋敷」の名は残り、神社への参道は今も青山露地と呼ばれます。



豊富な池の水を供給していたのは京都盆地の地下水脈で、この地にある京菓子の老舗「亀屋良永」「たちばなや」は現在も地下水を使い、地域の人々も希望すれば利用できるそうです。この水脈は醒ヶ井通の名の由来で、南に流れ五条を過ぎた処に「佐女牛井」の石碑が立っています。

豊富な池の水に着目し利用した人物が、型紙を用いて「写し友禅」を初めて事業化に成功した備後屋廣瀬治助、通称「備治」で、明治14年頃に技術を確立して、21年にこの屋敷地に2棟の工場を建設し、一時は職工60人を抱えて活況を呈したということですが、その後経営に失敗して引退し、23年に69歳で逝去しました。

しかし、この技法が発展してスクリーン捺染と呼ぶ一大分野になったことは周知の話です。

この湧水池は都市開発の影響もあってか水量が減少し、現在は数坪に満たぬ池が寂しく名残を留め、池の傍に「型友禅の祖 廣瀬備治翁遺蹟」と記した碑が立つだけですが、越後神社は別名友禅神社とも呼ばれ、毎年4月の例祭に合わせて友禅業者の団体が廣瀬治助を中興の祖として顕彰する儀式を行うと聞いています。

明石国助氏は染人という号で有名な染織研究家で、戦後の一時期に本学の講師をされていたのでご存知の方も多いと思いますが、偶然ながら昭和28年発行の氏の監修になる「宮崎友禅斎と近世の模様染め」という本を見る機会がありました。

内容は「近世模様染の発達」「宮崎友禅斎の生涯」「友禅斎の著書作品及び年表」に続いて、「鶴巻鶴一博士と近世の臈纈」「廣瀬治助翁と写染」の章を設けて事績を解説されています。一見の価値ある資料として一読をお勧めします。

(昭31・色染 和田弘)

(参考：故松尾秀明氏調査資料より)

#### 【明石 染人氏略歴及主要著書】

明治20年5月6日 京都山科に生る 本名は国助  
明治38年3月 京都府立第一中学校卒業  
明治42年7月 京都高等工芸学校色染科卒業  
明治43年11月 京都高等工芸学校助教授拝命  
大正9年11月 鐘淵紡績株式会社入社  
昭和9年4月 同社京都工場長となる  
昭和9年4月 エジプト及びヨーロッパ各国に出張を命じられる  
昭和22年2月 同社病気のため退社  
昭和10年～28年 旧恩賜京都博物館学芸委員嘱託  
昭和25年～34年 文部省文化財専門審議会専門委員に命じられる  
昭和28年～34年 奈良正倉院御物古裂調査委員  
昭和30年3月 社団法人日本工芸会設立発起人となる  
昭和32年～34年 京工大会第4代理事長  
昭和34年1月27日 死去

#### 【主要著書】

時代裂 昭和6年12月  
琉球染織名品集 昭和29年7月  
埃及コプト染織工芸史 昭和30年7月  
宮崎友禅斎と近世の模様染 昭和28年11月  
図説日本染織史 昭和27年3月  
日本染織文様集 昭和34年1月

## 互和讚会 25年例会 (S37年春)

今年の例会は平成25年11月19日(火)～20日(水)で、11月19日昼過ぎ、JR姫路駅に集合して始まった。

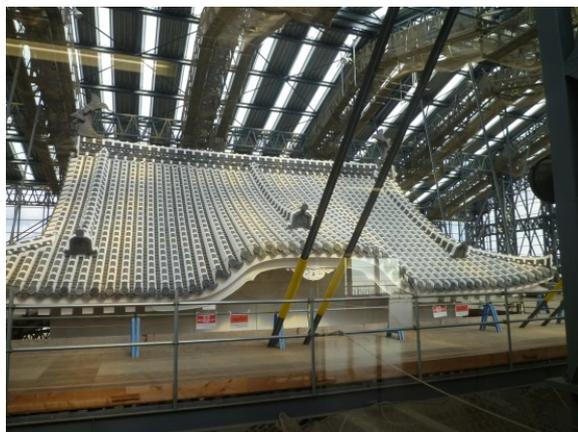
関東からの参加が3人、名古屋から1人計15人で駅前からバスで書寫山圓教寺に向かう。山全体が境内であるこの寺は、性空上人によって開かれ「西の比叡山」とも称されて信仰を集めて来たそうで、多くの重要文化財が現存し、紅葉が始まったこの時期多くの参拝者で賑わっていた。短い時間ではとても拝観出来ないくらい広い境内の中では、来年の大河ドラマ「黒田官兵衛」の収録も既に2箇所で行われたそうである。

歴史ある立派な建物に感嘆し、多くの仏像に手を合わせることに深い意義を感じる我々もそんな年齢になったのかとも思うと、何か感慨深いものがある。



この後迎いのバスで今日宿泊する塩田温泉の上山旅館に向かった。

旅館が2軒しかないひなびた姫路の奥座敷の温泉である。それでも小さな露天風呂もあり、ゆっくり浸かった後宴会、山海の料理に舌鼓を打ちながら酒も十分飲み満腹、部屋に帰っていつもの通り一部屋に集まり二次会、又三次会とあったのだが、私は残念ながら睡魔に襲われて宴会の後爆睡、面白かったであろう酒話会に参加出来なかった。本当はいつもこれが楽しく、頭のリフレッシュにもなるのだが……。



後日知ったがこの時の話題は今の人生を楽しんでいる友人の話や、次会の幹事は福西氏で、奈良や三重県の伊賀、上野方面で行うと話がついたと言うことが主だったそうである。翌朝奥山君も京都から車で駆けつけ16人で朝食、送迎バスで姫路城へ。

平成の大天守修理中の世界遺産でもある国宝姫路城で、その修理の様子を8Fまでエレベ

ーターで上がり 8 F で屋根修理を、7 F で壁面修理を間近に見学出来、その大掛かりな修理に感嘆した。約 5 年を掛けての大修理で平成 27 年早々の完成が楽しみである。

城前のレストランで昼食をとり、姫路城の西御屋敷跡庭園である好古園を見学した。

見事な日本庭園で、中央に造られた池を取り巻く庭の風景はどこから見ても素晴らしい View Point になっていた。



いずれにしても今の姫路は、来年の大河ドラマ「黒田官兵衛」の舞台になることを中心として非常に活気にあふれ、来年はまさに**姫路の年**の意気込みが感じられた。

我々のクラスは留学生を除いて 32 人、既に 10 人が他界している中で特に用事が重なり参加できなかった人以外体調不良 2、3 人であるだけで、多くが元気に参加出来たことを喜び、お互い健康で次回をと願いながら散会した。

今回の出席者 集合写真（上山旅館前）



後列左から 宮崎 博 高井禎之 岩坪正光 高井夫人 斎藤邦秀 泉 夫人  
阪口文雄 桜井建郎 佐原 肇 福西興至  
前列左から 山崎治忠 奥山正夫 宮脇雄也 三崎 歩 川崎登也 山中寛城

(色染 昭 37・山崎治忠)

# 奈良のこと (古都)

## (4) 興福寺・春日大社

南都7大寺とは一般に次の寺で、天皇勅願だけでなく藤原氏や蘇我氏の氏寺もある。

興福寺（藤原氏の氏寺）：京都山科の山階寺が起源

東大寺（天皇の勅願寺）：聖武天皇の発願

西大寺（天皇の勅願寺）：孝謙上皇の発願

薬師寺（天皇の勅願寺）：天武天皇の発願

元興寺（蘇我氏の氏寺）：蘇我馬子が飛鳥に建立した法興寺を前身とする。

大安寺（天皇の勅願寺）：聖徳太子の建立した熊凝精舎が起源

唐招提寺（鑑真の戒律修行の道場）

（唐招提寺に代わりに法隆寺が含まれる事もある）

飛鳥から藤原京、更に平城京へ都が遷るに従って、興福寺、薬師寺、元興寺、大安寺等が藤原京から従って来るが、平安京への遷都では移転を拒まれたようだ。そして、今日現在も奈良の都（みやこ）に1300年前の姿を留めている。

### \*興福寺\*

奈良に都が遷った頃、天皇を補佐する実力者は大化の改新で功績のあった中臣鎌足（藤原鎌足）の息子：藤原不比等であった。

不比等は都の一等地（都を一望出来る北東の丘）に、藤原氏の氏寺を建立した。

主な建物は710年から734年までの間に完成するが、度重なる戦火などで創建当初のものは皆無となっている。東金堂や五重塔は6度目の再建で室町時代の建造だが、藤原氏の権力と経済力で、焼失後直ちに創建当初と同じ姿（奈良時代からの伝統的様式である和様を守って）で再建を果している。（天皇勅願の東大寺では、大仏殿が140年もの間再建出来なかったのと大きな違い。しかも、創建当初とは異なる「大仏様」（合理的構造で安価）での再建となっている。）

建物名	(創建年)	再建回数 (再建年)
中金堂	(710年)	8度目の再建中 (2018年完成の予定)
北円堂	(720年)	3度目の再建 (1210年)
東金堂	(726年)	6度目の再建 (1415年)
五重塔	(730年)	6度目の再建 (1426年)
西金堂	(734年)	1717年に焼失：再建の計画無し
南円堂	(813年)	5度目の再建 (1741年)
三重塔	(1143年)	2度目の再建 (1187年)：現存中で最も古い

\*南円堂は重要文化財、他は全て国宝である。

食堂は1874年に廃仏毀釈のあおりで取り壊されたが、遺構の跡に創建当初の外観を残した鉄筋コンクリートの「宝物館」が1959年に建造された。

明治の廃仏毀釈の混乱では、五重塔が売却されてしまった。購入者は塔上部の青銅製相輪を回収するのが目的で、そのために塔を燃やそうとしたが、近隣住民の猛反対で断念せざるを得なかったとの事だ。危ういところで国宝の塔も生き残ることが出来たようである。

五重塔は南門下にある猿沢の池からの眺めが最高だと思っている。



また、ここから興福寺へ行くには「五十二段」の石段を登る。(52には意味があり：仏教を極める為に善財童子が52人の善知識に教えを請い、53人目が文殊菩薩である) 石段の上には東金堂があり、文殊菩薩が待っておられる。

### \* 興福寺の仏像 \*

興福寺のトップスターは「阿修羅」であろう。元は西金堂に祀られていた「八部衆」(釈迦如来の眷属)の一人で、少年の様な姿で人気を博しているが、元来は武闘派の仏で帝釈天と猛烈な戦いをしたことで有名である。(三十三間堂の阿修羅は怒りの表情である)

平安時代以降、興福寺は僧兵を擁し、大和の国の守護として権力を誇っていた。明治の廃仏毀釈では時の政府から目の敵とさ

れたため、一時は廃寺となりお寺は荒廃し、数多くの仏像などは流出してしまった。

現存する国宝の仏像数は、興福寺(17)、東大寺(13)、法隆寺(17)で、もし流出もなく残っていれば、この何倍もの数になるはずであり、思えば残念な話である。



「十大弟子」(釈迦如来の側近)も西金堂由来で、本尊の釈迦如来の側に置かれていた。何れも乾漆像(高価な漆を大量に使用)で、軽いため火災の時にも簡単に運び出されたので、今日まで残れたのであろう。

北円堂(弥勒三尊)、東金堂(薬師三尊：脇侍の日月光菩薩は国宝だが、本尊は重要文化財)、南円堂(不空絹策観音)、国宝館(千手観音)など、何れの仏像も国宝である。

国宝館の仏頭(国宝)は白鳳時代の薬師如来のもので、元は飛鳥の山田寺(蘇我氏の氏寺)の本尊であった。1187年に興福寺に運ばれ東金堂の本尊となるが、1411年の火災で体を失い頭部のみとなった、以来約500年の間行方不明であったが、1937年の東金堂解体修理の時に本尊台座の中から発見され大騒ぎとなった。白鳳時代仏像の特徴を持つ、素晴らしい風貌である。(白鳳のイケメンか?)

## \*春日大社\*

768年に創建され、4柱の神を祀るが、雷神（剣神）、水神とその妻などである。現代でも同様だが、地形から奈良時代には特に水は貴重で、農業や日常生活に欠かせないものであった。天気予報の無かった奈良時代では、大雨や干魃の無い事をひたすら神に祈るしかなかった。第一神「タケミカズチノミコト」は鹿島神宮から白鹿に乗って御蓋山（みかさやま）に降り立たれたと伝えられる。鹿は春日大社のお使いとして大事にされている。



奈良公園には約2000頭の鹿がおり、これらは神鹿として昔から大事にされてきており、今は天然記念物として保護されている。鹿達は野生であり、草や木の実などを食べて自活している。奈良公園の芝は何時も綺麗に刈り込まれているが、全て鹿がいるお陰である。もし奈良市が機械でやるとすれば莫大な費用が必要になるそうである。

春日大社は藤原氏の氏神であり、氏寺興福寺と一心同体の関係にあり、明治の廃仏毀釈は全てを興福寺が取り仕切っていた。

また、平城京の守護神としても大きな役割を果たしていた。

都が平安京に遷ってから、天皇家や藤原氏、貴族などの社参などを受け栄えていた。中世になると、武神や剣神としての性格が高まり、武運長久を願う武家の源氏、足利氏、豊臣氏などから厚い信仰を受ける。（「天地人」上杉家家老：直江兼継の献納した吊り灯籠も残っている）。室町以降では庶民の現世利益指向が大きくなり、庶民の春日講、七五三参りなどが盛んになって行く。春日さんと呼ばれ大和の人々に親しまれてきた。

春日大社には約2000基の石灯籠と約1000基の青銅製吊灯籠があり、平安時代（最古の灯籠は、1137年に藤原忠通寄進の柚の木灯籠）から現代まで、様々な様式の姿を残している。節分と中元（お盆）の万灯籠では全ての灯籠に明かりが点され見事である。

## \*春日若宮おん祭\*

春日大社・摂社若宮の祭礼で、毎年12月15日から17日に行われる。「春日若宮おん祭の神事芸能」は重要無形民族文化財に指定されており、神楽や田楽、舞楽、猿楽（能）、雅楽など古典芸能の継承・保存に大いに役立っている。

若宮の祭神「アメノオシクモネノミコト」（春日大社・第3神「アメノコヤネノミコト」の子供）は、水・学問・芸能の神様で、12月17日の午前0時から丸一日、御旅所に遷座し（遷幸の儀）、各種芸能の奉納を受けられる。

17日の「お渡り式」は、正午から「日使」（勅使）を先頭に猿楽、田楽、流鏝馬など一行（平安時代から江戸時代に至る風俗で彩られており、とても美しい。）が、興福寺を出発し、一ノ鳥居を入った所にある「影向の松」で、各種芸能を披露し御旅所に向かう。

奈良では大変寒い時期で小雪が舞ったりするが、深夜暗闇の「遷幸の儀」には、大勢の観光客が暗闇の中で行われる神事を見ようと集まってくる。

（色染・昭35 坂東久平）

# 色染昭和45年卒同期会

平成26年1月3日に45年卒の色染クラス会を開きました。(毎年正月の3日に新年会を開いています)

昨年度から場所を祇園縄手通りの北斎から変えて四条大宮の「酒旨処しんざん」で開催しています。参加者は毎年6～7名です。今年は長谷川裕二君も参加するとの事で楽しみにしていましたがインフルエンザでドタキャンでした。

日本料理の会席のフルコースで毎年一万円の会費は同じです。写真は一部ですがメンバーの山本宗雄君の家の前ですのでかなりサービスしてもらっています。

4時半から始まり終わったのが9時でした。

まずは、出席者の近況報告からはじまりました。

堀田君は大阪工芸会の事務局長、嶋田は日本技術士センターの事務局長、山本君は亀岡に捺染工場が移転した。山田君は京都の黒染の伝統工芸士資格を持った社長、西村君は中国へ4回の技術指導。八木君はグンゼのブラジル会社をリタイヤーしてフリーの身です。

同級生の消息や健康の話で議論伯仲でした。最近の進んだアイパッド、アイホーンのメリット、グルメの話になると止まらないぐらいです。

堀田君の息子さんがバルセロナで天ぷらや開いているとか、日経新聞の和歌の欄に横浜の石塚玲子さんの投稿がよく出るなど話題がつきませんでした。

今回は、八木君が毎年ブラジルへ行くので土産に最高級ウイスキー持ってくるので臨時クラス会を招集するという話でお開きになりました。

(色染 昭45・嶋田幸二郎、西村元廣)

## 色染・昭和45年度新年会

前列左から 八木哲雄、西村元廣、山本宗雄

後列左から 嶋田幸二郎、堀田英志、山田憲司



炭火の焼フグ、牛肉鉄板焼き、ズワイガニのたらふくコースと飲み放題

会員名簿

会員数：208名

平成26年3月31日

2期：H23. 10～H24. 9

3期：H24. 10～H26. 3

▲は携帯メール

メール欄にマークに無い方でアドレスをお持ちの方は、事務局までご連絡下さい。

	分類	氏名	メール	2期	3期
1	S14	小崎 輝郎		◎	
2	S14	古川 敏一	○	◎	◎
3	S19	小原 究		◎	◎
4	S19	宮永 正夫		◎	◎
5	S20	小黒 清明		◎	◎
6	S23	勝田 房治		◎	◎
7	S23	小出 宏		◎	◎
8	S23	中川 益男	○	◎	◎
9	S26	水谷 昌史	○	◎	◎
10	S28	稲井 新郎		◎	◎
11	S28	田尻 弘		◎	◎
12	S28	西川 三郎	○	◎	◎
13	S28	萩原 理一	○	◎	◎
14	S28	吉岡 悠	○	◎	◎
15	S29	梅本 顕		X	◎
16	S29	北浦 孝悦		◎	◎
17	S29	時岡 嘉一郎	○	X	◎
18	S30	井上 治彦	○	◎	◎
19	S30	末包 光太		◎	◎
20	S31	井尻 三郎		◎	◎
21	S31	岡野 志郎		◎	
22	S31	小倉 昭		◎	◎
23	S31	北川 全應		◎	◎
24	S31	上妻 喜久男	○	◎	◎
25	S31	小阪 能一	○	◎	◎
26	S31	中山 茂		◎	◎
27	S31	安田 功	○	◎	◎
28	S31	湯川 謙吉		◎	◎
29	S31	米長 粲	○	◎	◎
30	S31	和田 弘	○	◎	◎
31	S32	岩田 彬	○		
32	S32	坂井 武司	○	◎	◎
33	S32	阪田 昭蔵	○	◎	◎
34	S32	塩路 貴		◎	◎
35	S32	原 栄	○	◎	◎
36	S32	松本 日出男	○	◎	◎
37	S33	阿部 弘		X	◎
38	S33	井上 雅雄		X	◎
39	S33	佐々木 忠夫		◎	◎
40	S33	佐々木 晶一		X	◎
41	S33	白須 勝明	○	◎	
42	S33	平井 雅夫		X	◎
43	S33	菱田 三郎		X	◎
44	S33	福田 雍弘		X	◎
45	S33	三宅 昭彦			
46	S34	大多和 正己		◎	◎
47	S34	金久 俊伍		◎	◎
48	S34	後藤 芳弘	○	◎	◎
49	S34	佐藤 忠孝	○	◎	◎
50	S34	高瀬 進	○	◎	◎

	分類	氏名	メール	2期	3期
51	S34	萩原 章司		◎	◎
52	S34	間 照夫		◎	◎
53	S34	藤井 敏昭	○	◎	◎
54	S34	甫天 正靖	○	◎	◎
55	S34	松本 哲哉		◎	◎
56	S34	横山 清一郎	○	◎	◎
57	S34	吉岡 泰男	○	◎	◎
58	S35	安部田 貞治	○	◎	◎
59	S35	飯井 基彦	○	◎	◎
60	S35	衛藤 嘉孝	○	◎	◎
61	S35	大西 雄一	○	◎	◎
62	S35	黒田 亘哉	○	◎	◎
63	S35	鈴江 登	○	◎	◎
64	S35	園田 英雄	○	◎	◎
65	S35	中村 準市	▲	◎	◎
66	S35	林 俊郎	▲	◎	◎
67	S35	坂東 久平	○	◎	◎
68	S35	法貴 英夫	○	◎	◎
69	S35	松岡 謙一郎	○	◎	◎
70	S35	松木 雄一郎	○	◎	◎
71	S35	松本 繁男		◎	◎
72	S35	山田 英二	○	◎	◎
73	S36	市原 守		◎	◎
74	S36	奥 正夫	○	◎	
75	S36	加藤 維希夫	○	◎	◎
76	S36	松本 光之助	○	◎	◎
77	S36	横山 隆		◎	◎
78	S37	池田 晴充		◎	◎
79	S37	市川 喜代始	○	X	◎
80	S37	岩坪 正光	▲	◎	◎
81	S37	奥山 正夫		◎	◎
82	S37	川崎 登也		◎	◎
83	S37	阪口 文雄	○	◎	◎
84	S37	佐原 肇	○	◎	◎
85	S37	柴田 二三男	○	◎	◎
86	S37	高井 禎之	○	◎	◎
87	S37	福西 興至	○	◎	◎
88	S37	三崎 歩	○	◎	◎
89	S37	山崎 治忠	○	◎	◎
90	S37	山中 寛城	○	X	◎
91	S38	伊東 慶明	○	X	
92	S38	小島 堯	○	◎	◎
93	S38	小柳 健一	○	◎	◎
94	S38	中東 弘三	○	◎	◎
95	S38	中里 寿弘		X	◎
96	S38	橋本 清	○	◎	◎
97	S38	早貸 正幸	○	◎	◎
98	S38	廣瀬 良樹	○	◎	◎
99	S38	三河 明義	○	◎	◎
100	S38	森本 國宏	○	◎	◎

	分類	氏名	メール	2期	3期
101	S38	渡辺 勝彦	○	◎	
102	S39	浅井 敬造		◎	◎
103	S39	田中 邦雄	○	◎	◎
104	S39	森下 公雄	▲	◎	◎
105	S40	鈴木 允子		◎	◎
106	S40	田中 興一	○	◎	◎
107	S40	内藤 隆	○	◎	◎
108	S40	安田 惠一	○	◎	◎
109	S41	梶原 俊明	○	◎	◎
110	S41	中尾脩一		◎	◎
111	S41	西岡 靖之	○		
112	S41	吉岡 啓	○	◎	◎
113	S41	和田 明紘	○	◎	◎
114	S42	梅木 弘道	○	◎	◎
115	S42	北尾 三治		X	◎
116	S42	高井 貢		X	◎
117	S42	坂井 勝也		X	◎
118	S42	早藤 隆生		X	◎
119	S42	松原 昭夫	○		
120	S42	横山 彰夫	○	◎	◎
121	S44	小谷 正夫	○	◎	
122	S44	藤本 昌則	○	◎	◎
123	S44	山平 知伸		◎	◎
124	S44	吉井 康浩			
125	S45	飯塚 志保	○	◎	
126	S45	上田 善治	○		◎
127	S45	後藤 幸平	○	◎	◎
128	S45	竿山 重夫			
129	S45	坂本 修三	○	◎	◎
130	S45	嶋田 幸二郎	○	◎	◎
131	S45	西村 元廣		X	◎
132	S45	堀田 英志	○	◎	
133	S45	堀口 祐司	○	◎	◎
134	S46	北尾 好隆	○		◎
135	S46	桑原 正樹	○	◎	◎
136	S46	小柴 雅昭	○	◎	◎
137	S46	成見 和也	○	◎	◎
138	S46	樋口 郁雄	○	◎	◎
139	S46	米田 久夫	○	◎	
140	S47	小林 繁夫	○		
141	S47	高木 恒男	○	◎	◎
142	S47	瀧本 哲雄	○	◎	◎
143	S47	山口 繁雄			
144	S47	吉澤 恵子	○	◎	◎
145	S46	石田 泰和	○	◎	◎
146	S48	犬伏 康郎	○	◎	◎
147	S48	橋本 清保	○		◎
148	S48	服部 和正		◎	◎
149	S48	山本 博	○	◎	◎
150	S49	西島 洋美	○	◎	◎
151	S50	阿久根 隆行		X	◎
152	S50	石田 俊平	○	X	◎
153	S50	小沢 七洋	○	X	◎
154	S50	木下 修治	○	◎	◎

	分類	氏名	メール	2期	3期
155	S50	熊見 孝彦		X	◎
156	S50	後藤 康博	○	◎	◎
157	S50	柴岡 浩	○	◎	◎
158	S50	高野 良	○	X	◎
159	S50	寺澤 通隆	○	X	◎
160	S50	中川 順之	○	◎	◎
161	S50	濱田澄郎	○	X	◎
162	S50	松永 実	○	X	◎
163	S50	松原 美砂子	○	◎	◎
164	S50	松本 博	○	X	◎
165	S50	水野 庸子	○	X	◎
166	S52	有吉 晶子	○	◎	◎
167	S52	白井 文朗	○	◎	◎
168	S53	伊山 正三	○	◎	◎
169	S53	高橋 伸和	○	◎	◎
170	S53	長井 寛彰		X	◎
171	S53	西村 千佳子	○	◎	◎
172	S53	藤村 知男	○	◎	◎
173	S53	宮崎 義也	○	◎	
174	S53	森川 滋明		X	◎
175	S53	山田 衛	○	◎	
176	S54	柏原 俊博	○	◎	◎
177	S54	清水 多佳子	○		◎
178	S54	清水 穂積			◎
179	S54	土井 謙吾		◎	◎
180	S55	荒木 泰博	○		
181	S55	芝 泰清			
182	S56	今井 義彦	○		
183	S56	中野 峰夫	○		
184	S57	荻野 毅	○	◎	◎
185	S57	神野 友香子	○	◎	◎
186	S58	徳永 純子	○	X	◎
187	S58	青木 伸治	○	◎	◎
188	S58	岡 修也	○	◎	◎
189	S58	垣田 直彦	○	◎	◎
190	S58	姫野 貴司	○	◎	
191	S58	藤上 和久	○	◎	
192	S58	宮原 雅彦	○		
193	S59	穴迫 康之	○		
194	S59	島田 太朗	○		
195	S59	吉岡 崇	○		
196	S60	西内 誠		◎	
197	S62	木村 由和			
198	S62	藤川 達志		X	◎
199	S63	井藤 晶基	○		◎
200	S63	川端 利香	○		
201	S63	原 彰宏	○		◎
202	TS1	赤谷 宜樹		X	◎
203	TS1	池上 俊		◎	
204	TS1	貝増 匡俊		X	◎
205	TS2	阪上 智子	○		
206	TS4	中谷 昭彦	○	◎	◎
207	TS5	中村 誠一		X	◎
208	TS6	東光 勝也		X	◎

## 編集後記

ソチのオリンピック、パラリンピックも無事終わり、今回は日本選手の活躍も目覚ましく連日のテレビ観戦で寝不足になった方も多いと思います。

会誌第5号をお届けします。当会も再興後4年目となりました、会員数も200名を越え会の基盤も安定して来ています。会員の皆様の益々のご協力をお願いします。

## 京都工芸繊維大学色染物質会事務局

〒610-0121 城陽市寺田今堀 108-15

TEL 0774-52-4909

MAIL sikisen@matugasaki.com

URL <http://www.matugasaki.com>

色染物質会 会長 佐藤 忠孝